

ライフステージからみた観光地の選好と観光行動の実際

市村 真希

キーワード：観光，ライフステージ，旅行遍歴，旅行体験

1. はじめに

近年，世界中で，日本全国で，また私の周りでも観光に対する期待が高まっている。観光は人々に生きがいや安らぎをもたらし，ゆとりある生活の実現へ寄与する。それだけにとどまらず，観光産業は幅広い産業であるため，観光消費が多くの産業へ経済効果をもたらし，地域の再生・活性化に大きく寄与し，国内・国際交流にもつながる。2008（平成20）年には国土交通省の外局として「観光庁」が発足し，我が国はますます観光立国の実現に力を注いでいる。

しかし，そんな中，経済不況等の影響で近年我が国における国内宿泊観光旅行や海外旅行が低迷しており（図1，図2），日本の観光立国の実現にはまだまだ道のりが遠い状態だ。

私が観光について考えてみようと思ったのは，私自身，生まれて間もない頃から家族とともにさまざまな場所に旅行する機会が多く，近年日本がこのような不況下にあっても，自ら旅行の計画を立てて旅行に行ったりと，観光に対して深い興味や好奇心があるからだ。

本研究では，私は今まで誰と，どこに，いつ頃，どういった目的で，どのくらい旅行しているのかということをもとめ，それはライフステージによってどのように変容しているかということ进行分析・考察することを第一の目的とする。そして，私の旅行遍歴を日本全体の観光の動向や私の両親の旅行体験と比較することで，共通点や相違点，その要因を考察する。さらに私の旅行体験をもとに，観光と観光地の問題点や課題を明らかにして，今後を展望する。

研究の方法としては，まず私の旅行遍歴，旅行体験を整理・分析する。全国の旅行統計については，観光白書（国土交通省観光庁）の資料を多数収集・参照し，表や図を作成し，日本全国の観光の動向をまとめて，私の旅行遍歴と比較する。さらに，世代や家庭によって，旅行に対する意識や旅行回数，旅行目的がどう変化するか調査するため，私の両親にも詳しく話を聞いた。

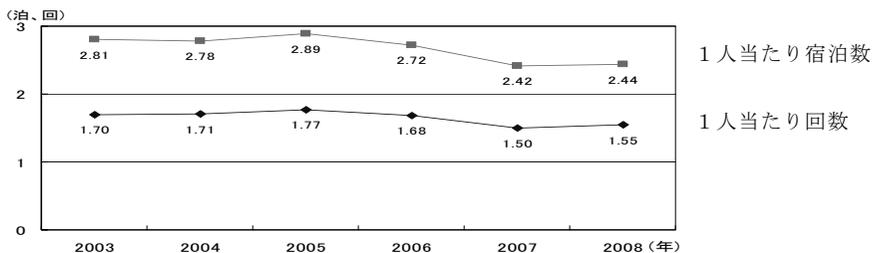


図1 国内宿泊観光旅行の年間回数及び宿泊数の推移

出所：『平成21年版観光白書』p.33より作成

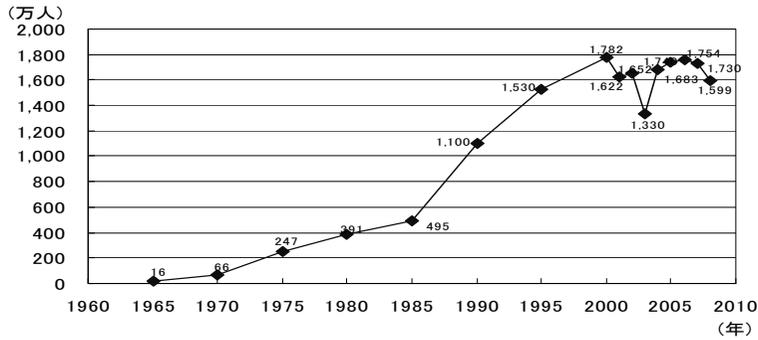


図2 日本人海外旅行者数の推移
出所：『平成 21 年版観光白書』 p. 35 より作成

2. ライフステージからみた私の観光旅行の変遷

私のこれまでの旅行遍歴を整理して、旅行回数、一緒に旅行するメンバー、家族構成、交通手段、旅行する時期、旅行目的という6つの観点から分析する。そのときそのときのライフステージにおいて、それらはどのように推移・変化してきたのか、その要因は何なのか、ということを考える。

観光旅行の回数に関しては、生まれてから今までの22年間の旅行回数合計が141回（日帰り旅行96回、宿泊旅行40回、海外旅行5回）である。日帰り旅行はやはり宿泊旅行や海外旅行よりも時間的にも金銭的にも行きやすいために、宿泊旅行の2倍以上行っている。それでも中学校に入るまで（1999年度¹⁾まで）はある2年を除いて、必ず年に1回以上家族で宿泊旅行に行っている。私の家族の旅行好きは火を見るよりも明らかだ。中学校（2000～2002年度）、高校（2003～2005年度）の間は勉強や部活動で忙しくなったため、宿泊旅行回数が減少した。ところが、大学に入ると（2006年度）、時間にも余裕ができるため観光旅行回数が一気に増えた。中学校で初めて興味をもった海外旅行にも、大学になって時間の余裕ができると、必ず年に1回行っている（図3）。

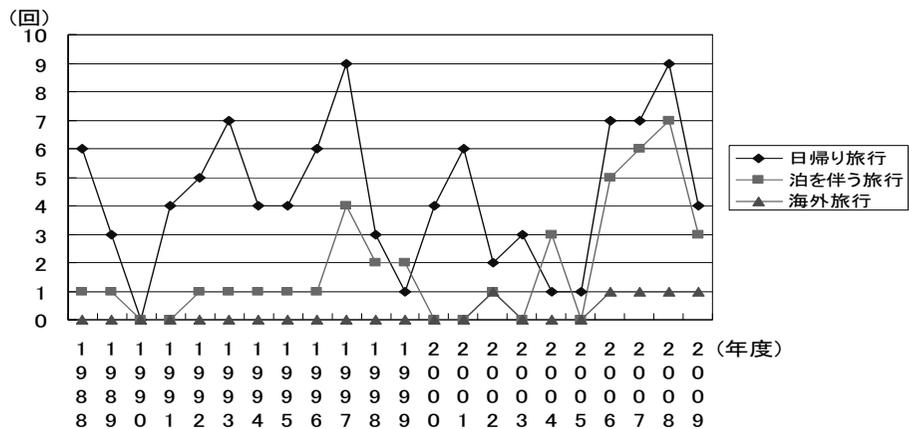


図3 私の観光旅行の回数の推移
出所：本人作成

私の観光旅行のメンバーに関しては、今までの旅行の合計回数 141 回のうち、家族旅行が 80 回（全体の 56.7%）、友人との旅行が 30 回（21.3%）、団体旅行が 31 回（22.0%）である。このように私の旅行の基本は家族旅行であり、乳幼児期から家族といろいろな場所に旅行に行ったため、旅行好きの性格が自然に出来上がってしまったといえよう。ただし、2000 年度（中学校入学）頃から家族旅行以外にも友人との旅行が少しずつ増加し、大学入学（2006 年度）と同時に、一気に友人との旅行と団体での旅行が増える。私は大学でよさこい部という部活に所属していたため、よさこいの祭りや演舞を兼ねて、部という一つの団体に旅行する機会が増えた。ライフステージによって、そのときそのときに自分が大きくかかわっている団体に旅行することが多いのだ（図 4）。

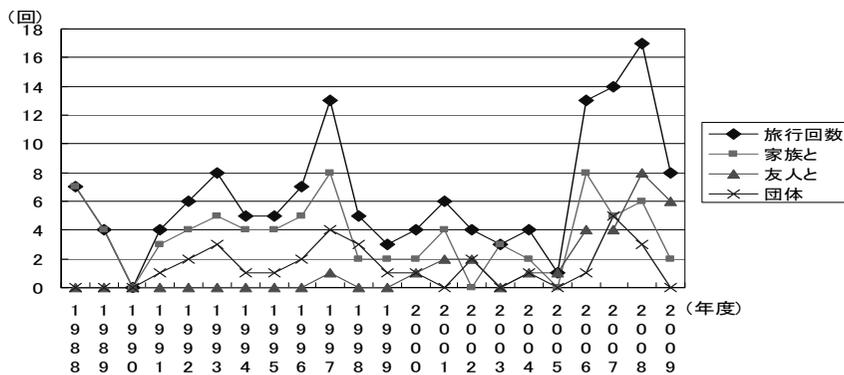


図 4 私の観光旅行のメンバーの推移
出所：本人作成

私の旅行の基本の家族旅行に関しては、ライフステージとともに、家族内で一緒に旅行するメンバーが少しずつ変化している。今までの家族全員での旅行回数の合計は 42 回であり、私が家族で旅行した回数全体 80 回の約半分を占めている。とくに私の乳幼児期（1988～1991 年度頃）には、家族全員で旅行する回数が多い。ただし、私が保育園に通い始めた頃（1992 年度）、当時姉が習い事として水泳を本格的にやり始めたことによって、母が少し忙しくなったため、私と父の二人で旅行する機会が多くなった。中学・高校の頃（2000～2005 年度）からは少しずつ母・姉と家族の女性 3 人で旅行することが増え、2006 年度以降は姉が就職前で忙しかったり、就職してから日程が合わなくなったりしたことで、私と両親の 3 人で旅行することも多くなった。それでも今も昔も、基本的にどこかに旅行するといときは家族全員で行動することが多く、明らかに旅行好きな家族といえよう（図 5）。

私の観光旅行のおもな交通手段に関しては、自家用車の利用が最も多く、旅行の合計回数 141 回のうち 83 回の旅行でもおもに自家用車を利用してはいる。自家用車は他の交通機関に比べ、いつでもどこでも好きなときに自由に安く移動できると同時に、個の空間であるため周囲に気をつかわず落ち着いて旅行できるという利点をもっている。観光バスをおもな交通手段として利用する旅行回数も多く、2000 年度までは学校や習い事の団体旅行で観光バスを多く利用しており、2006 年度以降は家族でツアー旅行に参加する機会が増えたため、家族旅行で観光バスを多く利用するようになった。また 2001 年度以降から電車がおもな交通手段として利用されている。これは中学校や高校の時期に友人と旅行に行ったり、近場の都市圏（大阪・神戸など）へ旅行したりすることが増えたためである。近年では海外旅行に行ったり、日本国内でも北海道や沖縄など遠出する旅行が増えたりしたため、飛行機

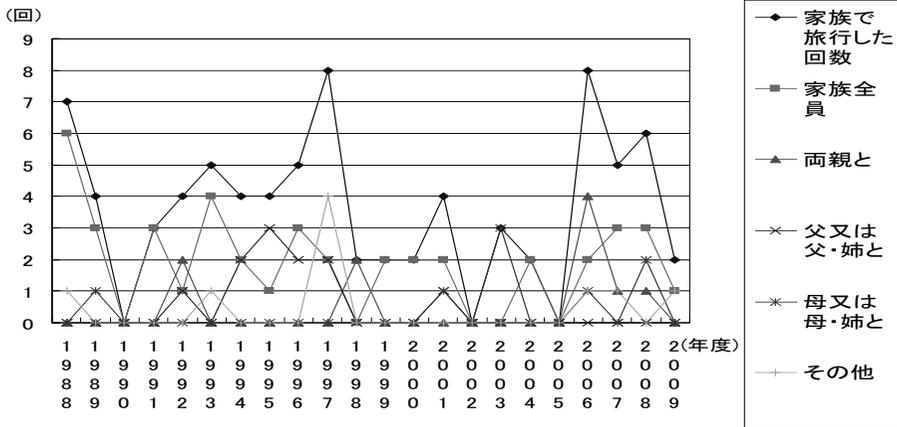


図5 私の観光旅行における家族構成の推移
出所：本人作成

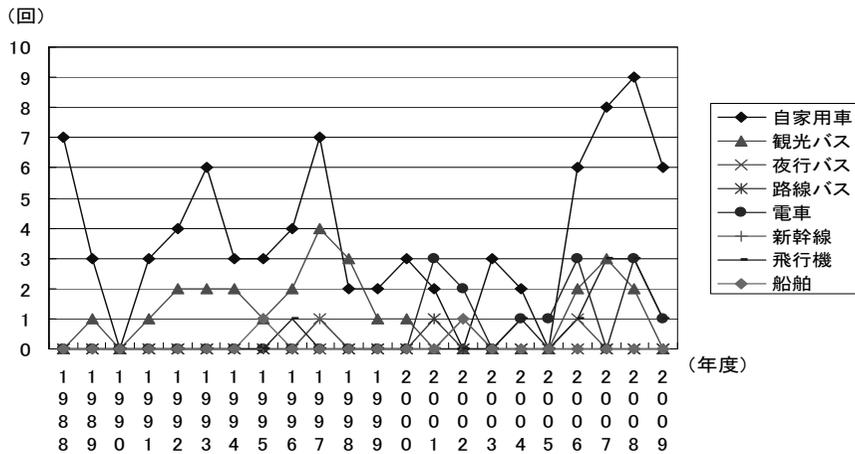


図6 私の観光旅行のおもな利用交通機関の推移
出所：本人作成

をおもな交通手段として利用する旅行も多い(図6)。

私の観光旅行の月別回数に関しては、8月は夏季休業であるため旅行回数がかかり多い。3月と9月も大学は1ヶ月間まるまる休みであるため、旅行回数が2006年度から一気に増える。逆に7月は、夏季休業前で休業中に旅行が控えているために旅行回数が少ない。また12月と1月は冬季休業があるが、とくに年末は忙しく、そして年末年始は旅行代金も高いため旅行回数が少ない(図7)。

私の観光旅行のおもな目的に関しては、乳幼児期は近場の施設に行ったり近場でぶどう狩りをしたりと、私の年齢に合わせて比較的ゆっくりのんびりする目的の旅行が多い。幼稚園から小学校にかけては、成長するにつれてハイキングや、川遊び、キャンプ、釣りなど、アクティブな目的の旅行が徐々に増えてくる。小学校、中学校、高校の間は、見学旅行や自然学校、修学旅行に行くため、学習を目的とした旅行の数も増える。大学に入って

数が増えた旅行目的は、温泉、グルメ、ドライブ、よさこい、文化巡りである。このような目的の旅行が増えた理由は、大学に入って自分の趣味に費やせる時間が増えたことである。このことが旅行に関するいろいろな考えを生み、旅行好きの私をさらに旅行好きにさせたのである。旅行目的は年齢や自分がそのときに所属している団体、そのときの自分の興味・関心が深く関係し、それによって旅行先が変わり、さらに交通手段も変わる。

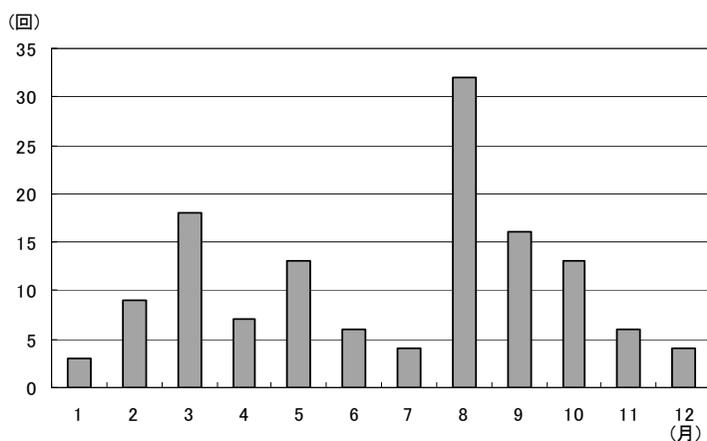


図7 私の観光旅行の月別回数（1988～2009年）

出所：本人作成

3. 私の観光行動と日本全体との比較

私個人の観光行動を日本における観光の現状から顧み、観光行動において私が日本全体の中でどのようなポジションにあるのかということ考察する。

国内観光旅行に占める家族旅行の割合に関しては、日本全体および同年代の若年層（20～29歳）の女性に比べて私は旅行の割合が少ないが、友人との国内宿泊旅行と一人での国内宿泊旅行の割合に関しては、若年層の女性と比較すると、私はほぼ同じような割合で旅行をしている。国内宿泊観光旅行回数に関しては、私は日本全体よりも多く、とくに2008年の17回は、同年代の若年層（20～24歳）の女性よりもかなり多い。2008年の海外旅行回数に関しても、私は日本全体の大多数よりも海外旅行に行っており、日本全体からみると少数派の中に含まれる。しかし、国内旅行の宿泊数に関しては日本全体より少ない。私の小学校時代の家族との国内宿泊観光旅行回数に関しては、小学校の子どものいる世帯の国内宿泊観光旅行回数とだいたい同じ程度であるといえる。旅行時期に関しては、国内旅行も海外旅行も、私は日本全体が多く旅行に行く時期に同じく旅行に行っている。海外旅行の滞在期間に関しては、日本全体の大多数と同様、私は5日程度の短い期間で海外旅行をしている。

このように、私の旅行遍歴を日本全体の観光の動向と比較して明らかになったことは、私の近年の旅行行動は、旅行時期や海外旅行の滞在期間、友人と国内宿泊旅行に行く割合に関しては、近年の日本全体の平均をたどっているが、国内宿泊旅行回数や海外旅行回数に関しては、近年の日本全体の平均よりも多いということだ。ただし、たとえ旅行好きの私であっても、私の旅行行動は日本全体の平均から大きく逸脱しているわけではなく、同じような行動をとっているということが分かった。

4. 両親と私自身の旅行遍歴の比較

私の両親と私自身の旅行遍歴を比較することで、共通点と相違点、さらにはその要因を考察する（表1、表2）。

高校卒業までの両親の旅行遍歴と私の旅行遍歴を比較すると、まず明らかに違うのが旅行回数である。両親は高校卒業までに数えるほどしか旅行に行っておらず、それも家族と旅行することはほとんどなく、せいぜい学校から行く旅行であった。それに対して私は、生まれて間もないときから家族とさまざまなところに旅行に行き、いろいろな体験をしてきた。このおもな要因は家庭全体の旅行やレジャーに関する意識のもちようである。日本全体で見ると、親の子ども時代の旅行経験や印象が肯定的である程、その子どもの国内宿泊観光旅行回数が増加する傾向がある（図8）。子どもの頃は家族旅行が主体となるため、親の旅行に対する意識が重要だ。私の両親によると、両親がそれぞれ育った家庭はどちらの親も旅行に行くという価値観や文化自体がほとんどなかったという。逆に私の家庭は、両親が大学に入学して以降、徐々に旅行に魅力を感じ始め、旅行が好きになっていったため、今でも両親の旅行に対する意識が高い。だから私の場合、生まれたときから今まで旅行が自分の生活の一部になっており、旅行が私の生活サイクルを作っているといっても過言ではないだろう。

次に、大学時代の両親と私の旅行体験を比較する。両親と私で共通している点は、大学に入ると、旅行回数が増えるということだ。大学時代は時間にゆとりをもつことができ、個人的な自由な時間も増えるため、一世代違っても旅行好きであればそういった時間を利用して旅行に行く機会が増えるのであろう。また私と私の父親で共通していることは、二人とも大学ではサークルや部活動に所属していたため、その団体に旅行に行くことが増えるということだ。私であればよさこい部に所属していたので、旅行目的がよさこい演舞やよさこい祭りなど「よさこい」に、父親であれば古美術研究会に所属していたので、旅行目的がその研究のための合宿や古美術見学になり、自分が携わっている分野に関係する旅行目的が増える。

両親と私の旅行体験の相違が際立つのは、交通手段である。高校卒業までは両親の旅行回数が少なく比較できないため、大学時代を比較する。両親の大学時代は両親がまだ自分の自家用車をもっていなかったという理由も含め、自家用車での旅行はほぼしておらず、電車やバスが主である。しかし、私は自家用車をもっていたため、旅行するときは大半自家用車を利用している。この明らかな違いは時代的背景によるもので、両親の時代は学生が自家用車をもつというものは一般的ではなかったが、現代は学生が自家用車をもつというものはそれほど珍しいことではない。こういった時代的背景が旅行の交通手段に違いをもたらすのだ。

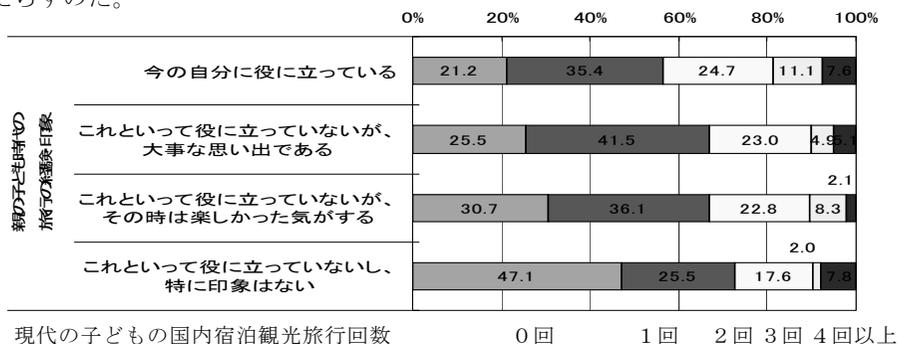


図8 親の子ども時代の旅行の経験・印象とその子どもの旅行回数

出所：『平成21年版観光白書』p.20より作成

表 1 両親と私のライフステージ

年度	元号	父親	母親	私	本論文の呼称
1953	昭和 28	誕生			↑ 幼い頃 (父) ↓
1954	29				
1955	30				
1956	31				
1957	32				
1958	33				
1959	34		誕生		
1960	35				
1961	36	小学校 1			
1962	37	小学校 2			
1963	38	小学校 3			↑ 学生時代 (父) ↓
1964	39	小学校 4			
1965	40	小学校 5			
1966	41	小学校 6	小学校 1		
1967	42	中学校 1	小学校 2		
1968	43	中学校 2	小学校 3		
1969	44	中学校 3	小学校 4		
1970	45	高校 1	小学校 5		
1971	46	高校 2	小学校 6		
1972	47	高校 3	中学校 1		
1973	48	大学 1	中学校 2		
1974	49	大学 2	中学校 3		
1975	50	大学 3	高校 1		
1976	51	大学 4	高校 2		
1977	52	会社に入社	高校 3		
1978	53		大学 1		
1979	54	小学校教員	大学 2		
1980	55		大学 3		
1981	56		大学 4		
1982	57				
1983	58	結婚	結婚		
1984	59				
1985	60				
1986	61				
1987	62			誕生	
1988	63				
1989	平成元年				
1990	2				
1991	3				
1992	4			保育園	

1993	5	幼稚園	
1994	6	小学校 1	
1995	7	小学校 2	
1996	8	小学校 3	↑ 小学校中学年 ↓
1997	9	小学校 4	
1998	10	小学校 5	
1999	11	小学校 6	
2000	12	中学校 1	
2001	13	中学校 2	
2002	14	中学校 3	高校受験の年
2003	15	高校 1	
2004	16	高校 2	
2005	17	高校 3	大学受験の年
2006	18	大学 1	↑ 近年 ↓
2007	19	大学 2	
2008	20	大学 3	
2009	21	大学 4	

表 2 両親と私のライフステージの比較

ライフステージ	父親	母親	私
誕生	1953年9月	1959年7月	1987年10月
保育園			1992年4月 1993年3月
幼稚園			1993年4月 1994年3月
小学校	1961年4月 1966年3月	1966年4月 1971年3月	1994年4月 1999年3月
中学校	1967年4月 1969年3月	1972年4月 1974年3月	2000年4月 2002年3月
高校	1970年4月 1972年3月	1975年4月 1977年3月	2003年4月 2005年3月

大学	1973年4月 1976年3月	1978年4月 1981年3月	2006年4月 2009年3月
入社	1977年4月～		
小学校教員	1979年4月～		
結婚	1983年	1983年	

5. おわりに

これまでの私の旅行体験、現在の日本全体の観光の現状を踏まえて、観光と観光地の問題点や課題を見出し、観光地を活性化させ、観光を促進するためにはどういった視点や方策が必要であるか考察し、今後を展望する。

観光地の問題点や課題の一つ目は、私がこれまでいろいろな観光地を訪れてよく感じることである。それはある観光地に着いたとき、その駅や観光案内所に、その地を観光するモデルコースが書かれたパンフレットが少ないことだ。そのようなモデルコースの載ったパンフレットが駅や観光案内所に行った際に手に入れば、目的もなくふと足を伸ばして訪れた旅行者にとってはとても助かる。そのモデルコースも1パターンだけでなく、複数のパターンを紹介したり、年代別や目的別に最適なモデルコースを紹介したりすると、今度はこのモデルコースを訪れてみようというリピーターを増やしたり、幅広い人々に満足のいく旅行を提供したりすることができる。逆にそのようなパンフレットが観光地にあれば、もっと気軽に観光地に足を運ぶことができ、観光客数の増加につなげることができるだろう。

二つ目は、地域固有の資源を活用した魅力ある旅行商品を開発することである。現在、物見遊山的な観光から、体験型・交流型の観光へと、旅行者のニーズが多様化している。すでに観光地として栄えている地域もそういったニーズの多様化に合わせて、常に訪れた人々が新鮮な気持ちになるような新しい旅行商品を開発していかなければならない。たとえば近年、グルメ志向の観光が人々の間で広まっているため、グルメを中心とした旅行商品を創造し、広くPRすることが観光地としての地域の活性化につながるのではないだろうか。実際、私が行った2008年12月の兵庫県の山東町への旅行や、2009年11月の香川県への旅行は、それぞれの地域で有名な玉子かけご飯、讃岐うどんを食べに行くというグルメが目的の旅行である。とくに歴史的な建造物や遺跡、文化財などが無い地域は、地域固有のグルメを全面的に押し出すことで、観光地として振興させていけるであろう。

三つ目は交通アクセスについてである。たとえば、地域を走る路線バスの発着時刻の遅れは観光客の信頼を失うことになる。このことは路線バスだけでなく、すべての公共交通機関においていえることで、観光振興を図る視点からもこういった地方公共交通の基本的な要件をまずはしっかりと見直し、整備しなければならない。また観光地に訪れやすくするために、空港や鉄道、路線バス、旅客船、高速道路等の整備をますます進め、移動の高速化・円滑化や、道路渋滞の解消、安全性・快適性を図る必要がある。観光立国を実現するため、交通機関や施設のバリアフリー化、駅や交通ターミナルにおける外国人旅行者に対する案内表示の情報提供等、万人にとって利用しやすい環境にすることをさらに一層推進する必要がある。

観光そのものに目を向けると、観光を促進するためには「きっかけ」が必要である。きっかけには、行きたいところが見つかる、誘いがあると、資金ができると、時間ができると、といったようにさまざまなものがある。その中でも私が最も重要視するものは、「他者からの誘い」である。実際、観光白書(2009)によると、若年層、とくに大学生にとっ

ては他者からの誘いが国内宿泊観光旅行に出かける重要なきっかけとなっている。このような旅行の誘いを旅行会社や地域、国がもっともっと積極的にする必要はある。私の旅行体験の中で、他者からの誘いで行った旅行の例としては、よさこい演舞、国際交流を目的に、2007年10月に部活動のメンバーと行ったポーランド・ワルシャワ旅行（旅行会社からよさこい部への誘い）だ。このように、大学生のグループ活動などに旅行を組み込む働きかけや、私が2006年10月に行った地域のバーベキューを兼ねたクリーン作戦のように、地域から住民へどんどんイベント情報などを発信して勧誘することが大切である。ただし単に「誘い」というきっかけをつくるだけではなく、幅広い年齢層が魅力を感じる旅行プランを開発する必要がある。

ほかにも、低価格の旅行プランや家族それぞれが楽しめるような観光地づくり、旅行プランの開発や有給休暇の促進、多くの人が旅行への興味・関心を高めるための試みを進める必要がある。観光立国を実現するために、これらの取り組みを国と地域、地域住民、旅行関係会社が一体となって今後も進める必要がある。

私は小学校の教員として、今後、地域の魅力や観光の意義に関する子どもたちの理解を増進させたいと思っている。とくに社会科の時間や総合的な学習の時間では、観光に関連させることのできる部分は力づくでも関連させるなどして、学校教育における観光の位置づけを高めていきたい。同時に私の感じる観光の魅力や意義を子どもたちに伝え、将来の観光地域づくりの人材育成と観光の活性化に力を注ぎたい。

注

1) たとえば、1999年度は1999年4月～2000年3月の1年間である。以下、同じ。

引用文献

淡野 明彦 (1998) : 『観光地域の形成と現代的課題』, 古今書院, 169p.

国土交通省観光庁 (2009) : 『平成21年版観光白書』, 144p.

引用 URL

国土交通省 (2010) : 国土交通省観光庁. <http://www.mlit.go.jp/kankocho/index.html>

Practical preference of tourist behavior from the viewpoint of life stage based on my own experience

ICHIMURA Maki

Key Words: jourism , life stage, travel itinerancy, travel experience